この想いの名前は知らない

この想いの名前は知らない<前編>

芳流（kaoru）

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=15168077

ダイの大冒険, ヒュンマ, ヒュンケル, マァム, ダイ大小説50users入り, モルグ

不死騎団長ヒュンケルと人質マァム。前編。
ヒュンマ必修科目。
ほかの作品とはつながらない独立の物語です。

Table of Contents

この想いの名前は知らない＜前編＞

　敵国を攻めるのに欠かせないものの一つが、地図だ。
　地形によっては、自国の地図が敵国に渡るのは、致命傷になりうる。
　地底魔城の会議室のテーブルの上に広げられた、パプニカ王国の地図を見据え、不死騎団長ヒュンケルは思案に暮れていた。
　テーブルの周囲には、アンデッドのモンスターが数名、自らの主同様に屹立して、その決断を待っていた。
　その種族は、デスプリースト、ヘルクラッシャー、がいこつ剣士。
　彼らから少し離れて、礼服を身にまとった、くさった死体の男が立っていた。
　ヒュンケルは、しばしの沈黙の後、地図から顔を上げ、全員を見渡して指示を下した。
「パプニカ城が落ちたいま、目標は３つだけだ。」
　全員が自分の言葉に耳を傾けているのを確認し、いったん言葉を切った。
　ヒュンケルは、指示をつづけた。
「１つ目は、パプニカ王の遺体の確認。２つ、パプニカ王たる証の王家の指輪の回収。そして、３つめが、王家の生き残り、王女レオナの捕縛だ。」
　ヒュンケルは、地図を指さしながら指示をした。
「王の遺体は、落城したパプニカ城か、あるいはその隣のパプニカ大神殿跡だろう。指輪も王が持っていたと考えるのが通常だ。すでに捜索をしているようだが、ここの地域に一軍を割く。」
　そういって、ヒュンケルは顔を上げ、がいこつ剣士の男を見据えた。
「お前の軍を派遣する。かならず、見つけろ。」
　主の下命に、がいこつ剣士は、短く返事をした。
「はっ。」
　ヒュンケルは、また地図に目を落としながら、言葉をつづけた。

「王女は見つからないようだな。」
「はっ・・・。」
　デスプリーストの男が、神妙に答えた。
「もうこの地域にはいないだろう。港は封じてある。このホルキア大陸で隠れ潜むとすれば、森か、あるいは・・・離島か。それだけの技術があるかだな。」
　ヒュンケルは、言葉を紡ぎながら考えをまとめているようであった。
　ヒュンケルは、面を上げると、デスプリーストの男と、ヘルクラッシャーの男に指示を下した。
「お前たち二人の軍で、まずは、王都周辺の森を探せ。王女本人でなくとも、逃げた痕跡でもいい。手がかりがなければ話にならん。まずは、５日。それで何の手がかりもなければ、捜索範囲を変える。」
「はっ。」
　男たちは、そろって短く返事をした。
「俺は、勇者が攻めてくるのにここで備える。遠からず、やってくるだろう。」
　感情をこめない冷淡な声で、ヒュンケルは配下に告げた。
　人質がいるからこそ、勇者の少年たちはすぐにこの城に攻めてくる。だが、ヒュンケルは、その言葉は口にしなかった。
「ヒュンケル様。」
　デスプリーストの男が主に呼びかけた。ヒュンケルは答える。
「何だ。」
「王女は、捕縛、でよろしいのでしょうか。」
「ああ。」
「つまり、生きたまま捕らえろ、と。」
「そうだ。」
　ヒュンケルは、簡潔に答えた。
「王女は生きたまま捕らえろ。その上で、我らが大魔王様に恭順の意を示させる。」
　ヒュンケルは、配下の者たちを見据え、言葉をつづけた。
「パプニカ王の死を確かのものとして示し、パプニカ王族の生き残

りの王女に王たる証の指輪の献上とともに、大魔王様に恭順の意を示させる。パプニカ王国の滅亡を明らかにするには、それで十分だ。」
　ヒュンケルの言葉に、３人のアンデッドたちは恭しく頭を下げた。
「はっ。ご下命のままに。」
　ヒュンケルは、アンデッドたちが首を垂れる中、会議室を後にした。

　ヒュンケルが会議室を出ると、その後ろに、くさった死体の男が続いた。
　ヒュンケルは、足を止めることも、後ろを振り返ることもしなかったが、背後の男に言葉をかけた。
「モルグか。何か言いたげだな。」
　モルグと呼ばれた、くさった死体の男は、ヒュンケルに答えた。
「はい。王女の処遇、慈悲深いことかと。」
「皮肉か。」
「いえ、あなた様らしいです。しかし、懸念がひとつ。」
「なんだ。」
　モルグは、声を落としてヒュンケルに問いかけた。
「大魔王様や、ハドラー様が王女の処遇に納得されなかった場合は、いかがいたすおつもりですか。」
　ヒュンケルは。わずかに苦い色を帯びさせた声で、言葉を返した。
「・・・そのときは、王女に自害してもらう。」
「自害、ですか。」
　モルグは言葉を切った。
　ヒュンケルは、振り返らないまま答えた。
「そうならないことを祈るがな。王族とはいえ、おんな子どもの命まで取る必要もあるまい。」
　その言葉を聞き、モルグはヒュンケルらしいと思った。
　この不死騎団長は、魔王軍の軍団長でありながら、ただ敵国を攻め滅ぼすことだけではなく、被害を少なくすることを考えている。

「モルグ。」
「はい。」
　ヒュンケルは、相変わらず、足を止めず、振り返らないままモルグに言葉をかけた。
「・・・あの娘は、どうしている。」
　明言はしなかったが、ヒュンケルの言葉が指す娘が、一昨日捕らえたばかりの勇者の仲間の少女を指していることは、モルグにはすぐに分かった。
　モルグは困った声で答えた。
「それが、少々手を焼いております。」
　モルグは続けた。
「あのお嬢さん、昨夜から、ヒュンケル様に会わせろと何度も申し立てておりまして・・・牢番のミイラ男が困り果てておりますよ。」
「・・・俺に、会わせろと？」
　ヒュンケルは、意外そうな声を上げた。
　昨夜、ヒュンケルは、少女を放り込んでいた牢に出向いた。
　彼女はヒュンケルの話を聞いて涙を流し、彼に訴えかけた。あなたはもっと強い人だ、と。
　たまらず、ヒュンケルは彼女に手を上げた。
　腹が立ったからではなかった。言葉で言い返すことができず、そのいら立ちを抑えきれぬまま、彼女の言葉を封じるために暴力に訴えたのだ。
　武人としてだけでなく、男として、恥ずべき行為だった。
　そのような出来事があったばかりだというのに、あの少女は、自分に会わせろと訴えているという。文句を言いたい、とでもいうのか。
　モルグは、ヒュンケルの問いに、困ったような声で答えた。
「はい。」
　モルグは、ヒュンケルの様子をうかがった。後ろ姿からは表情はうかがえないが、彼の主がいつになく戸惑っているのは、長年仕えてきたモルグにはよくわかっていた。
　１日だけこの地底魔城に滞在した妖魔師団長のザボエラにまで、

「えらく気になっている」と揶揄されたぐらい、人質として捕らえたはずの少女にヒュンケルが気を取られていることを、モルグは十分に把握していた。
　こんなことは、モルグがヒュンケルに仕え始めてから一度もなかった。
　モルグは、淡々と問いかけた。
「お部屋に、お召しになりますか？」
　ヒュンケルは答えなかった。
　モルグの言葉が、表現以上の意味を持っていることはヒュンケルにもわかっている。
　ヒュンケルのためらいに気づいてか、モルグは言葉をつづけた。
「ヒュンケル様がお気に召されたのであれば、お側に置かれること、わたくしめに異論はございません。
　確かに、あのお嬢さんは、勇者の仲間ですし、『アバンの使徒』などと名乗っているようではございますが、ヒュンケル様が勇者を倒してしまえば、あのお嬢さんひとりが大魔王様の脅威になるとは思えません。
　お側に置かれたとしても、大魔王様も、ハドラー様も、おとがめにはなさいませんでしょう。」
　モルグは淡々と、ヒュンケルの建前を崩していく。
　そして、もう一度、同じ言葉で問いかけた。
「お部屋に、お召しになりますか？」
　ヒュンケルは、まだためらいを感じつつも、うなずいた。
「・・・ああ。」
「では、お夕食の後に。
　身なりを整えさせてから、参ります。」
　モルグは、ヒュンケルの背後で、恭しく主に頭を下げた。

　マァムは、一昨日から両手を後ろ手に縛られて牢に捕らえられていた。
　何度も戒めを解こうともがいたが、思い通りにならない。
　マァムは、牢の扉の向こうに人の気配を感じると、昨夜からそうしているように、外の者に訴えかけた。

「お願い！話を聞いて。あの人に・・・ヒュンケルに会わせて！」
　もう何度も繰り返している言葉を投げかけた。
　これまでは、無視されるか、扉を叩かれて威圧されるばかりであった。しかし、マァムもあきらめない。
—もう一度、ヒュンケルに会わなくちゃ・・・。ダイをヒュンケルと戦わせたくない・・・！
　マァムはその一念で、何度も牢番に訴えかけた。
「お願い・・・！そこに誰かいるんでしょう？」
　すると、これまでとは異なり、マァムの呼び声にこたえるように、金属音が扉の向こうから響いた。マァムは息をのんで扉を見つめた。
　がちゃがちゃと鍵を開ける音が響く。重い音を立てて木の扉が開いた。
　そこには、見覚えのある礼服姿のアンデッドモンスターが立っていた。
「威勢のいいお嬢さんだ・・・。」
　あきれたようにつぶやくその男に、マァムは見覚えがあった。マァムを最初に牢まで連れてきたときに一緒にいた、くさった死体の男だった。
　男はマァムに注意した。
「少しおとなしくしていてください。そんなにお転婆では、ヒュンケル様のところまでお連れできませんぞ。」
「連れて行ってくれるの？」
　マァムはその言葉にくいついた。
　くさった死体の男は、悠然とした笑みを浮かべてうなずいた。
「お連れ致しますとも。ですので、おとなしくしていてください。
　それと、そのお姿では、とてもお連れできませんぞ。まずは、湯浴みをして、お召し物も換えていただかなければ。」
　その程度の条件でヒュンケルに会えるのであれば、マァムに異論はない。マァムはアンデッドの男の言葉に素直に従った。

　湯殿までの通路を、マァムは、くさった死体の男に導かれ、後をついて歩いていた。

マァムの両手は、相変わらず後ろ手に縛られており、その両手を縛った縄の端は、マァムの後ろを歩くミイラ男の手に握られていた。歩きにくいが仕方がない。
マァムは、前を歩く、くさった死体の男の横顔を斜め後ろから覗き見た。
このアンデッドは、ほかのアンデッドモンスターたちと何か雰囲気が違う。
そう感じたマァムは、おずおずと男に声をかけた。
「あの・・・あなた、ヒュンケルに仕えている、の・・・？」
「はい。モルグと申します。」
マァムは、モルグにヒュンケルのことを聞きたいと思ったが、会話の糸口がつかめず、当たり障りのないことを尋ねた。
「では、モルグさん。
ヒュンケルに仕えて、長いの？」
「そうですね・・・あの方が１５の頃からですから、もう６年になりましょうか・・・。いま地底魔城にいるアンデッドの中では、古参になりますね。」
ということは、ヒュンケルは、いまは２１歳ということか。彼が魔王軍の軍団長であることを考えると、思ったよりも若いとマァムは感じた。
マァムは、この城に初めて連れてこられたときのモルグの言葉が気にかかっていた。
「モルグさん、あなた、一昨日、私に、『ヒュンケルは優しい』って、言ったわね。あれは、どういう意味・・・？」
モルグは、マァムを振り返らずに答えた。
「言葉のとおりでございますよ。何か、おかしな点でも？」
そのように返されて、マァムは戸惑った。
「おかしいっていうわけじゃないんだけど・・・。」
口ごもるマァムに、モルグは尋ねた。
「ヒュンケル様のことをお聞きになりたいのですかな。」
「ええ。」
マァムの肯定を受け、モルグはうなずいた。
「よろしいでしょう。ならば少々。」

モルグは淡々と語り始めた。
「ヒュンケル様は、私がお仕え始めた１５歳のころから、大魔王様麾下の戦士として、手勢を率いて戦っておられました。もっとも、あの当時は、大魔王様のご側近の配下の騎士、という地位ではございましたが。お一人でもお強いですが、軍を率いて戦うことにも、昔から長けていらっしゃいました。」
　モルグは続けた。
「ヒュンケル様が、正式に、不死騎団長の地位に就かれ、大魔王様配下のアンデッドモンスターを一手に率いるお立場になられたのは、２年前のことです。」
　そこまで話すと、モルグは足を止めて、突然マァムを振り返った。
　至近距離まで顔を詰められ、マァムはぎょっとした。モルグの、抜け落ちそうな眼玉が眼前に迫っていた。
「・・・お嬢さん、我々アンデッドを、ほかのモンスターと比べていかが思われますか？」
「・・・え・・・？」
　マァムは、モルグの意図を図りかねて言葉に詰まった。
　幾分かひきつった顔でモルグを見るマァムに、モルグは寂しそうな笑みを浮かべた。
「無理に答えなくて結構ですよ。お嬢さん、あなたのその顔が示しています。
　我々アンデッドは、ほかのモンスターに比べて地位が低い。見た目や因習の問題もありましょうが、何より、我々が、命を持たず、他者に依存するしかない存在だからでございましょう。」
　マァムは、言葉の意味をつかみかね、モルグに聞き返した。
「他者に依存する・・・？」
　モルグは、マァムに背を向けて、また歩き始めた。マァムも後に続く。
「例えばです。大魔王様が、死体に魔力を与え、アンデッドをお作りになったとしましょう。そのアンデッドは、大魔王様の魔力なくしては生きられません。ほかの方がお作りになられても同じです。与えられた力の源から外に出ることはできません。」

「それは・・・あなたもそうなの？」
「細かいことはお話できませんが、概ね、同じと思っていただいて結構です。」
　モルグは言葉をつづけた。
「アンデッドの中にも、強い魔力や戦闘力を持つ者もおりますし、そのようなアンデッドを重用される方もいらっしゃいます。ですが、あくまでそれは例外のこと。
　我らはほかのモンスターに比べ、忌み嫌われ、蔑まれる存在なのですよ。」
　淡々と語るモルグの言葉に、マァムは寂しさを感じていた。
　モルグはマァムに話をつづけた。
「そんな我らを指揮する方として、ヒュンケル様は、不死騎団長の地位を賜りました。」

　ヒュンケルが、初めて不死騎団長として、魔王軍配下のアンデッドモンスターを一堂に集めたとき、モルグはヒュンケルの側近として、その後ろに立っていた。
　地底魔城の謁見室。
　かつては魔王ハドラーが君臨したその場で、ヒュンケルは、幾百ものアンデッドモンスターを前にしていた。
　臆することなく、堂々としたたたずまいで、ヒュンケルは、玉座を背に、その場に立った。
　集められたアンデッドモンスターたちは、年若い、それも人間の軍団長を前に、神妙な面持ちをしている者や、眉をひそめている者さえもいた。
　そんな彼らを前に、ヒュンケルは、はっきりとしたよく通る声で語りかけた。
　ヒュンケルの澄んだ声が、朗々と、謁見室に響き渡った。
「今日から、私がお前たちの主となる。
　名は、ヒュンケル。
　聞き覚えのある者もいるだろう。
　見ての通り、種族は人間だ。
　だが、人間の私が不死騎団長となったのは、お前たちが軽視され

てのことではない。
　お前たちの力をいかんなく発揮させるための大魔王様のご英断にほかならない。」
　ヒュンケルは、いったん言葉を切り、全員を見渡し、語りかけた。
「お前たち、アンデッドの中には、これまで、ほかのモンスターから侮蔑され、不当な扱いを受けてきた者もいよう。また、これから、そのような目に遭う者もあるかもしれん。
　だが、臆するな。
　恥じるな。
　お前たちに対する不当な差別は、この私が許さない。
　お前たちは、栄誉ある魔王軍の、我が不死騎団の一員なのだ。
　それを忘れるな。
　たとえ命なき者と蔑まれようとも、お前たちは確かな意思を持ち、ここに存在している。
　私は、それをよく知っている。
　誇りを持て！」
　ヒュンケルの言葉の前に、アンデッドたちは、水を打ったように静まり返った。
　そして、１名、また１名と、彼の前に膝を折り、頭を垂れた。
　その様子を、モルグは、ヒュンケルの後ろからまざまざと見せつけられた。

　モルグは、マァムに語った。
「ヒュンケル様は、我らにおっしゃいました。
　たとえ命なき者と蔑まれようとも、お前たちは確かな意思を持ち、ここに存在している。
　誇りを持て、と。」
　モルグは言葉を切った。
「アンデッドの中には、その作られた際の魔力の作用により、自我の強い者もあれば、自我の弱い者もおります。ですが、その一切を区別することなく、ヒュンケル様はおっしゃいました。
　だから、我ら不死騎団は、ヒュンケル様のために戦うのです。そ

の存在をかけて。我らアンデッドを個々の存在として尊重してくれるあの方のために。
　数ある魔王軍の軍団の中で、我ら不死騎団が、真っ先に王都を攻め落としたのは、偶然ではありませんよ。」
　モルグの言葉には、不死騎団の一員としての、ヒュンケルの側近としての誇りがあった。モルグは、一通り語り終えると、マァムに向かって言葉を投げかけた。
「ヒュンケル様はお優しい方です。言葉どおりの意味です。
　お嬢さん、あなたの問いに対する、これが答えですよ。」
　マァムは、モルグの言葉に、ヒュンケルに対するゆるぎない信頼を見た。
　そして、彼らを個々の存在として尊重するヒュンケルに、深い、慈悲の心を感じた。
　マァムは、笑みを浮かべた。
「モルグさん、ありがとう・・・。」
　思いのほか穏やかなマァムの声に、モルグは意外な思いがして、ちらりと背後を盗み見た。
　マァムは、嬉しそうに笑みを浮かべていた。
　モルグは、マァムに尋ねた。
「どうかなさいましたかな？」
　マァムは首を横に振った。
「いいえ、なんでもない。
　でも、お話が聞けて良かった。ヒュンケルは、私が思った通り・・・ううん、それ以上、だわ。」
　ヒュンケルは、勇者アバンが見込んだ、一番目の少年だった。
　たとえ、魔王軍の中にあっても、その心根は変わっていない。
　取り戻したい。彼を。
　マァムは強く思った。

　湯殿の前まで来ると、モルグたちは、マァムを脱衣所に通した。ようやく、手首の戒めが解かれ、一人になった。
　だが、モルグが、すぐに侍女を寄こすと言っていたので、時間はあまりない。

マァムは、扉の外に控えるモルグたちに聞こえないように、小さな声で、己の胸元に呼びかけた。
「もういいわよ。ゴメちゃん。」
マァムの呼び声に答え、マァムの胸元から、おずおずと、羽の生えた、金のスライムが１匹、姿を現した。申し訳なさそうな目をしている。その姿にマァムは安堵した。
「やっぱり、あなただったのね。服の隙間に何か入っていると思ったら・・・。
無茶して。あなたまで見つかったらどうするつもりだったの？」
小声で、精いっぱい怖い顔でスライムを叱るマァムに、ゴールデンメタルスライムの彼は、目を潤ませて恐縮していた。
マァムは笑みを浮かべ、息を吐いた。
「もう、しょうがないわね。
でも、うれしかったわ。一人で心細かったの。ありがとう。」
そういって、小さなスライムの頬に、マァムはキスをした。
スライムは、ぱっと頬を赤らめ、ふらふらと墜落しそうになっていた。
マァムは慌ててゴールデンメタルスライムの彼を受け止めた。
マァムは、彼を抱きかかえたまま、湯殿の中に足を踏み入れた。
あたりを見回して、目指すものを見つけると、スライムに指さした。
「ゴメちゃん、あれ見て。」
マァムの指の先にあったのは、通気口だった。
ここ、地底魔城は、かつては魔王ハドラーの居城であり、今も、昔も、アンデッドだけでなく、ほかのモンスターや魔族も出入りしていた。
そのため、各部屋には通気口が張り巡らされ、呼吸をする生き物の生活に支障がないように作られていた。
マァムのいた牢にも通気口はあったが、その口には、金網が張られており、見張りもいたため、この小さな仲間を脱出させることはできなかった。
だが、今なら別だ。
「ゴメちゃん、あそこを通って、外に出て。ダイと、ポップに知ら

せて。
　時間が欲しいの。７日・・・ううん、５日でいい。私に時間をちょうだい。ヒュンケルを説得するの。ダイを、ヒュンケルと戦わせちゃいけないわ。」
　真剣に語るマァムに、ゴールデンメタルスライムの彼は、鳥のように鳴いて抗議をした。
　マァムはなだめた。
「私なら大丈夫。心配しないで。
　さっ・・・早く、行って！」
　マァムは、強引に小さな使いを送り出した。

　ヒュンケルは自室のソファに腰を下ろし、ため息を吐いた。
　モルグが、まもなく人質の少女をこの部屋に連れてくるらしい。
　落ち着かない。
　自分らしくない、とヒュンケルは思った。
　得体の知れない焦燥や戸惑い。もう一度、あの娘に会えば、この不可解な感情を消し去ることができるだろうか。
　漠然とヒュンケルがそう考えていたとき、部屋のドアがノックされた。
　モルグだろう。
「入れ。」
　ヒュンケルは短く入室を許可した。
　予想どおり、開いた扉の向こうには、見慣れたくさった死体の男が、いつものように手に盆を持って立っていた。
　普段と異なるのは、彼の背後に、少女が立っていたことだった。
　モルグは、慣れた様子で室内に入ると、背後の少女をヒュンケルの自室内にいざなった。そして、彼は、慣れた手つきで、盆の上のグラスや水差しを順にテーブルに置いていった。
　水のたたえられた水差しと、揃いの柄のグラスは二つ。
　それとは異なる柄の、足のついたグラスは一つ。
　モルグは、少女の様子を気にすることなく、淡々と、普段と同じ動作でテーブルの上を整え、最後に足の着いたグラスに液体を満たすと、自らの主に恭しく頭を下げた。

「それでは、失礼いたします。」
　モルグは、マァムがいない日と同じ様子で、彼女の顔も見ずに、部屋を後にした。
　部屋の中には、ヒュンケルと、マァムだけが残された。
　ヒュンケルは、ちらりとマァムの様子をうかがった。
　昨日、牢で会った時とは異なり、城の侍女たちと同じ、簡素な長袖のワンピースに身を包んでいた。快活だと思っていた彼女の印象が少し変わった。
　髪は下ろされており、肩下まで伸びた髪の先は少し湿っていて、ほのかに、サボンと湯のにおいを漂わせていた。
　マァムは、落ち着かない様子で、何か言葉を探しているような、不安を感じているような、そんなようにも見えたが、考えあぐねているのか、ヒュンケルの前で佇んだまま、なにも言葉を発しなかった。
　二人とも、動かず、言葉も継がず、沈黙が流れていた。
　それを破ったのはヒュンケルだった。
　ヒュンケルは感情をこめない声で尋ねた。
「・・・俺に会いたいと言っていたそうだな。何の用だ。」
　マァムは、戸惑った様子で、考え込んでいたが、やがて、意を決したように、ヒュンケルをまっすぐに見つめた。
　意志の強い眼差しがヒュンケルを射る。
「ダイに会ってほしいの。」
　その言葉に、ヒュンケルは、眉をひそめた。
　マァムはつづけた。
「ダイは、デルムリン島で鬼面道士に育てられた孤児だわ。あなたと同じ、モンスターに育てられているの。それだけじゃない。とても素直で、純粋で、優しい少年だわ。きっと、あなたのことを理解してくれる。」
　マァムは、訴えかけるような瞳でヒュンケルを見つめ、懸命に言葉を紡いだ。
　彼女の言葉に、ヒュンケルは大げさにため息をついた。
「・・・そうだったな。勇者ダイの育ての親は、デルムリン島の鬼面道士。卑怯にもそれを人質にとる作戦を進言したある軍団長のた

めに、獣王は勇者に敗れた。
　そうだったな。」
　当たり前のことを確認するようなヒュンケルの言葉に、マァムは意外そうな声を上げた。
「知っていたの・・・？」
　ヒュンケルは、にべもない様子で答えた。
「当然だ。ひどい作戦だった。あんなことさえなければ、クロコダインが子どもになど負けるものか。」
　だが、マァムは、なおもヒュンケルに食い下がった。
「でも、ダイに会ったのは、この前が初めてでしょう？ちゃんとダイと会って、話をしてほしいの。そうすれば、きっと、あなたにもダイが戦うべき相手じゃないってわかるし、ダイも、あなたのことを理解してくれるはずだわ。ダイは、あなたと同じ境遇で育ったんだもの。」
　ヒュンケルは、冷たい視線をマァムに送った。
「甘い考えだな。失ったことがない者に、地獄にいる者の気持ちなどわかるものか。」
　吐き捨てるように言い、ヒュンケルは、マァムを見上げた。
「お前、なぜ、そこまで俺にこだわる。俺は魔王軍の軍団長だ。お前たちにとって倒すべき敵のはずだ。」
　ヒュンケル自身にはっきりと敵だと表現され、マァムは一瞬、たじろいだように見えた。
　だが、マァムは、まっすぐにヒュンケルを見つめると、意志の強い眼差しを彼に向け、きっぱりと言い切った。
「だって、あなたは、アバンの使徒だから。」
　その信念には、一分の揺るぎもなかった。
　マァムはヒュンケルに語り掛けた。
「アバン先生が卒業の証を渡した相手は、そう多くはないわ。あなたはその最初のひとり。アバン先生が、人を見誤るはずはない。そのアバン先生が、あなたに卒業の証を渡したのだから、きっと、先生は、あなたの中に正義を見たのだわ。」
　アバン。
　憎むべき父の仇の名だった。

もっとも聞きたくない男の名が、少女の口から飛び出した。ヒュンケルは、いらだち、こぶしをきつく握り締めた。
　アバンの影が、今も彼に付きまとう。
　結局、この娘も、アバンの後姿を追っているだけではないか。
　ヒュンケル自身のことなど、何も見ようともしていない。
　だが、そのヒュンケルの心情を知ってか知らずか、マァムは、さらにヒュンケルに呼びかけた。
「あなたは魔王軍にいるべき人じゃない。あなたはアバン先生を、人間を憎んでいるっていうけれども、本当はそうじゃないんでしょう？」
「お前に何がわかる！」
　ヒュンケルは、声を荒げた。
「俺がアバンと別れて、何年が経ったと思っている。１０年以上だ。その間、俺がどんな闇の中にいたのか、お前もアバンも知りはしない。１０年以上も前に、アバンが卒業の証を俺に渡したことにどんな意味があるというのだ！」
　ヒュンケルの怒声を受け止め、だが、恐れることもなく、マァムは、真剣な瞳でヒュンケルを見つめた。
　マァムは、ゆっくりと言葉を紡いだ。
　それは、マァムが知るはずのない言葉だった。
「たとえ、命なき者と蔑まれようとも、確かな意思を持ってここに存在している。」
「お前・・・。」
　マァムは、ヒュンケルを見つめたまま、続けた。
「あなたの言葉よ。」
　ヒュンケルは、マァムから視線を外した。ため息を吐く。
「・・・モルグか。」
　彼の言葉をこの少女に教えた者は、彼の忠実な側近に他ならなかった。
「自分の部下のアンデッドモンスターに、この言葉をかけられる人が、憎しみで生きているはずがないわ。」
　マァムは、すがるように、ヒュンケルに言葉を投げかけた。
「あなたは、本当は、悲しかっただけなんでしょう？小さいとき

に、たった一人の家族を失ってしまったんだもの。悲しくないわけないわ。私にだって、そのくらい、わかる。でも、それは、憎しみじゃないわ。」
　マァムは、目に涙をためて、訴えかけた。
「あなたは、優しい人だわ。だから、よけいに・・・悲しいのね。」
　マァムは、ゆるぎない視線をヒュンケルに向けながら、諭すように、彼に語り掛けた。
「ヒュンケル、悲しみを憎しみでごまかすのはやめて。
あなたの悲しみが私で少しでも癒せるのなら・・・私、あなたの力になりたい・・・。あなたのそばにいてあげたいって・・・そう思うの・・・。」
　マァムの目じりから、涙が一筋、零れ落ちそうになっていた。泣くのは卑怯だと思っているのか、マァムは、懸命にそれをこらえていた。
　綺麗な涙だ。
　昨夜、牢で見た美しい雫を思い出し、ヒュンケルは目を惹かれた。
　だが、同時に、それは、ヒュンケルに強い危機感を与えた。
　マァムのまっすぐな言葉が、綺麗な涙が、ヒュンケルを揺さぶり、惑わせる。
　この娘は危険だ。
　このまま共にあっては、己を維持できない。
　マァムの言葉も思いも、どこまでも甘美で、心地よかった。だからこそ怖かった。
　ヒュンケルは、目を奪われていたことを隠すように、目を伏せてマァムから視線を外した。
　この娘は、どこまで俺を信じているのだろうか。俺が、自分の言葉に感じ入り、矛を収めるとでも思っているのか。
　ならば、俺がその期待に反する行動をとれば、この娘は俺に失望し、諦めるのではないか。
　それとも・・・。
　マァムの言葉に感じるわずかな期待を、ヒュンケルは無理やり打

ち消した。
　ヒュンケルは、ぽつりとつぶやいた。
「俺は、そんな高潔な人間じゃない・・・。」
　ヒュンケルは、顔を上げ、はずした視線をマァムに戻した。
　そして、その目に危険な色を宿し、わざとらしく、冷酷な笑みをその秀麗な面に浮かべた。
「お前、俺のことばかり考えているようだが、少しは自分の心配をしたほうがいい。」
「え？」
　戸惑うマァムに、ヒュンケルはつづけた。
「ここは、俺の城で、お前は、捕らえられた人質だ。お前の味方は、この城に一人もいない。その俺の部屋に、こんな遅い時間に一人で招かれて、何とも思わないのか？なにも、危険がない、とでも？」
　ヒュンケルは、ゆっくりと立ち上がると、マァムに向かって歩みを進めた。
　一歩、また一歩と、二人の距離が縮まる。
　そうして、腕が届くほどの距離に来たかと思うと、ヒュンケルは、右手でマァムの頬に触れた。
　その目に宿る不可解な色に恐れをなしたのか、マァムは、とっさに、半歩、身を後ろに引こうとした。
　だが、ヒュンケルの動きはそれよりも早かった。
　左腕をマァムの背に回し、彼女の身を腕の中に閉じ込めた。
　頬に触れていた右手の指が、マァムの輪郭をなぞり、顎へと伸びる。
　瞬く間に、ヒュンケルは、マァムの唇を奪っていた。
　ヒュンケルの鼻腔を、マァムの体から立ち上る、サボンと湯の香りがくすぐった。
　その香りは、どこまでも甘く、彼を揺さぶった。
　ヒュンケルは、胸にマァムの手の感触を感じた。
　懸命に逃れようと、彼の身を押そうとしているのだろう。
　だが、鍛えられた体はびくともしなかった。
　ヒュンケルは、唇を離すと、腕の中のマァムを抱え上げた。

バランスを崩したマァムが、短い悲鳴を上げ、とっさに彼の首にすがった。
　そのまま両手で彼女を抱きかかえ、ヒュンケルは、隣室へと続く扉を開けた。
　隣室は、彼の寝室になっていた。その奥には、上質だが華美ではない、優に３人は横になれそうな、大きな寝台が置かれていた。
　ヒュンケルは、大股で寝台に歩み寄ると、腕の中に抱きかかえたマァムの体をその上に横たえた。
　どさりと、寝台に下されたマァムが上を向くよりも早く、ヒュンケルは、マァムの手首をつかみ、寝台の上に押さえつけた。
　右手でマァムの左手首を、左手でマァムの右手首を抑え、寝台に彼女の体を張り付ける。
　そのまま、マァムを上から覗き込み、見つめた。
　マァムの手がもがくように暴れたが、すぐにおとなしくなった。
　ヒュンケルは、マァムの手首を抑えつけた姿勢のまま、まっすぐに彼女を見つめて、言った。
「お前が欲しい。」
　マァムが息をのみ、こわばった顔で自分を見上げるのを、ヒュンケルは自分の瞳に映していた。
　彼は、そのまま目的を達しようとしていたが、自分を見上げるマァムの眼差しに動けなくなり、マァムに覆いかぶさった姿勢のまま、彼女を見つめた。
　マァムもまた、視線を外せず、まっすぐにヒュンケルを見上げていた。
　その唇が、呻くようにわずかに動き、だが何も音を発しなかった。
　二人とも、動かず、なにも言葉を発しない。
　やがて、震える声で、マァムが尋ねた。
「・・・どうして・・・？」
「俺にもわからん。」
　ヒュンケルは、ぽつりとつぶやいた。
　先ほど見せた危険な色は、その瞳から去り、ひどく凪いだ目で、彼は、マァムを見つめていた。

人質なのだから好きにするのは当然だとか、従えなどと言うのは簡単だった。悪ぶる方が楽だった。
　それにも関わらず、まっすぐに彼を見上げるマァムの目が、抑えたはずの彼の本心を引き出していた。
　ヒュンケルは、つぶやくように言葉を紡いだ。
「女を抱きたいわけじゃない。ただ・・・お前が欲しい。お前に触れたい。・・・そう、思った。」
　そう言って、マァムを見つめた。
　マァムの瞳に、自分の姿が映っていた。
　ふと、瞳ではない、彼女の心に、自分の姿はどう映っているのだろうか。柄にもなく、そんなことを思った。
「いやなら、振り払え。戦士なのだ、それくらいできるだろう。」
　ヒュンケルはそう言ったが、マァムは、暴れることももがくこともしなかった。
　恐怖で体がすくんで動けないのかもしれないとヒュンケルは思った。
　そのまま、二人とも言葉を発しなかった。動くこともしなかった。
　しばしの沈黙が二人の間を流れた。
　やがて、マァムが、唇を震わせて、言葉を絞り出した。
「ヒュンケル・・・お願い、手を・・・放して・・・。」
　その言葉が、彼を突き刺した。
　ヒュンケルは、マァムから視線を逸らし、自嘲めいた笑みを浮かべた。
—・・・何を期待していたのだ、俺は・・・。
　マァムの視線を受け止められず、目を逸らしたまま、ヒュンケルは、マァムの手首を握る力を緩めた。
　自分の手の下から、マァムがするりと両手首を抜く感触がした。
　両手の中に閉じ込めた蝶が、緩めた手の隙間から羽ばたき、逃げてゆくのを、ヒュンケルは感じた。
　ヒュンケルは、何かをあきらめたような面で、体を起こそうとした。
　そのときだった。

—・・・え？
　ヒュンケルは、バランスを崩した。
　気が付くと、ヒュンケルは、うつぶせの姿勢のまま、倒れこんでいた。
　自分がどのような姿勢になっているのか、ヒュンケルはすぐには把握できなかった。
　ただ、うつぶせに倒れた己の体の下に、寝具の感触だけでなく、柔らかな、少女の体の感触があった。
　首には、細い腕が巻かれていた。
　耳元で、マァムの声が聞こえた。
「だって、あのままじゃ、あなたを抱きしめられない。」
　ヒュンケルは、寝台の上で、マァムに抱きしめられているのに気が付き、戸惑い、そのまま動けなくなった。
　身じろぎもせず、彼女に身を任せていた。
　やがて、つぶやくように、マァムに尋ねた。
「・・・なぜ・・・？」
「私にもわからないわ。」
　返されたのは、先ほど、彼がマァムに答えたのと同じ言葉だった。
　ヒュンケルの体を柔らかく抱きしめたまま、マァムはささやいた。
「でも、さっきの言葉は嘘じゃない。あなたの悲しみが私で癒せるのなら、あなたの力になりたい。あなたのそばにいてあげたいって・・・。」
　ヒュンケルを抱きしめるマァムの腕に力がこもる。反対に、言葉は震え、涙の色を帯びていた。
　マァムはつぶやいた。
「あなたのことをもっと知りたい。・・・あなたに、触れたいの・・・。」
　たまらず、ヒュンケルは、マァムの背に腕を回した。
　きつく、呼吸さえも苦しいくらいに強く、マァムの体を抱きしめた。
「・・・後悔するぞっ・・・！」

うめくようなヒュンケルの言葉に、ヒュンケルは、マァムが静かに首を横に振ったのを感じた。